

# 歌や物語に詠まれた鈴虫

## 鳴く虫の和歌集

後撰和歌集卷第十八雑四

鈴虫におとらぬねこそなけれけれ 昔の秋を思ひやりつつ

左大臣

拾遺和歌集卷第三秋

いづこにも草の枕をすずむしは ここをたびとも思はざらん

伊勢

後拾遺和歌集第四秋上

秋風にごゑよわりゆくすずむしの つひにはいかがならんとすらん

大江匡衡朝臣

としへぬる秋にもあかずすずむしの ふりゆくままにごゑのまされば

前大納言公任(藤原 公任)

とやかへりわがてならしはしたかの くるときこゆるすずむしのこゑ

大江公資朝臣

たづねくる人もあらなんとしをへて わがふるさとのすずむしのこゑ

四条中宮

詞花和歌集卷第三秋

ふるさとははらざりけりすずむしの なるみののべのゆふぐれのこゑ 橘為仲朝臣

玉葉和歌集卷第四秋歌上

すずむしのこゑふりたつる秋の夜は あはれに物のなりまさるかな

和泉式部

すずむしの声みだれたる秋の野は ふりすてがたき物にぞ有りける

藤原敏行朝臣

続千載歌集卷第四秋歌上

しめのうちの花のにほひをすず虫の 音にのみやはさきふるすべき

詠み人知らず

山家集上秋

草深み分け入りてとふ人もあれや ふりゆく跡の鈴蟲の聲

西行法師

政宗和歌集

伊達政宗卿詩歌要釋

我宿の庭の村萩咲きしより 思ひぞいづる宮城野の原

伊達政宗

虫の音は涙もよほす夕まぐれ さびしき床の起伏も憂し

伊達政宗

鳴く虫の聲を争ふ悲しみも 涙の露を袖にひまなき

伊達政宗

